
隣のホストさん

松原志央

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隣のホストさん

【Nコード】

N9858A

【作者名】

松原志央

【あらすじ】

しがないアパートに一人暮らしをする18歳の現役女子高校生・仲間紫唾は勉強のためと辞めさせられたバイオリンがまだ心を掴み何と無く空っぽの毎日を送っていた。そんなある日、隣に越してきた5つ年上のホスト・橋矢田弥恵が彼女の部屋に誤って帰宅、睡眠それをきっかけに始まるホスト×女子高校生の恋。

ちよつと恋に落ちた瞬間（前書き）

不定期更新になると思いますが……どうぞよろしく。
面白いと感じていただけたら、嬉しいです。

ちょっと恋に落ちた瞬間

私、現役女子高校生の仲間　紫唾は、しがないアパートに住む18歳だ。

平穏な生活を愛し、勉強にも励み……な、分けなく、勉強のためと16の時辞めさせられた大好きだったバイオリンが私の心を掴んではなさない。

生活に潤いがなかった。しかしこの潤いのない生活も昨日から私の隣に越してきた人物により終りを告げることになる。

「弥恵さん……何やってるんですか」

「んー？しいちゃん家でご飯」

今、昨日から越してきた隣人は私の部屋にいて、シチューをすすりつつ、にへらあ、と笑う。

「……それでもホストなんだから呆れる……」

「しいちゃんだって、高校生なのに主婦並にご飯作れちゃうじゃない」

「……もう良いです」

全く、弥恵さん　橋矢田　弥恵さんが隣に越してきたからと言

ハシヤタヒロエ

うものの、週3程度夕御飯を食べに来るもんだから米の減りが激しい。

それよりも驚くのは弥恵さんの体格。あんなに沢山食べるのに相変わらず肉付きの悪い腕してるし。

私は自分のシチューをよそって弥恵さんの正面に座る。

「しいちゃんたら照れちゃってかぁ〜いい」

「は」

「だから、かあいいつってんの」

「……ホストには騙されない」

「なっ！ちよつとそれ酷くない？！俺は今仕事のつもりじゃないんだけど！」

「でも流石職業ですよ。口がうまいし。そうやってまた私を誉めてご飯頂くつもりよね」

「ばれた？」

本日2回目のあの笑い。実は物凄くこれがNo.1ホストの座を誰にも渡さない物だったり。5つも年上のこの男は、出会ったときからヘタレていた。

雨の日だった。久し振りにバイオリンが弾きたくなり、リビングでバイオリンを弾いていた。曲は『プレリユード』。

きっとバイオリンで玄関が開く音が聞こえなかったんだ。私がリビングを後にし、寝室へ足を運ぶと……。

「……もう、嫌だよ……真由……帰って来てよ」

「……」

ベッドには今日越してきた隣人、弥恵さんが泣きながら寝ていた。どうやら職業はホストらしいと聞いていたが本当らしい。こんな時間に帰って来るなんて。しかもこのスーツ。派手なインナーの襟を出しキメキメのホストだ。

「……ここ私の家だよね」

「……」

「起きろ馬鹿ホストがあああ！」

「ぎあああ！」

私は最初に相手が泣きながら寝ていた事も忘れ、きつとホストが口説きに來たんだわ、何ておかしい発想のもと弥恵さんを蹴りあげた気がする。

あれは絶対に間違えて入って來た弥恵さんが悪い。……百歩譲り鍵を賭けていなかった私も私だとして。

なのに弥恵さんは『ホストの顔に傷付けたら商売にならないよ。お詫びに俺にご飯作りなさい』とか言って現在に至る。

どうせそれきりの付き合いだと思っていたから、今日の夕方にインターホンがなったのには驚いた。

「……弥恵さん？」

「へへ……しいちゃんのご飯が食べなくなっちゃった」

あまりにも不意打ち過ぎませんか。だって仮にもNo.1ホスト、誰だってちよつときめくわけで。

「……やだ」

「ええ！冷たくない？！俺まだ昨日のお酒抜けてなんだよ？水とか！水！」

「弥恵さんとか人一倍お酒抜けるの早そうじゃないですかっ！」

ほら出た。あの笑い……いかん！私の敵ね。

「……じゃあ、待っててください？シチュー作りますから」

「さっすがしいちゃん！でもコーンはよしてよ」

「早速入れるものが決まったわね」

「小悪魔！」

ほらね、その笑みがまた私を貴方に近付けた。本当に敵だ。

ちよっと、恋に落ちた瞬間。

ホストクラブ フィーバー（前書き）

引き続き楽しんでいただけたら幸いです。

ホストクラブ フィーバー

恋を自覚したとして、5つ年上の弥恵さんだから私に勝ち目はないのは分かっている。でも。

出会って一週間。一向に諦めがつかない私って未練がましいだろうか。

会わなければ忘れられるのに。弥恵さんたら鈍いから

「しいちゃんのご飯」

とか言いながらほぼ毎日家に来るわけで。でもきつと私がどうかじゃない。

弥恵さんはホストだし。それなりに出会いは沢山あるわけで。

「しいちゃんっ！今日俺とデートしない？」

そんな事言われたら、期待しちゃうし傷付くのも分かってるのに。

「……………」

「しいちゃんてば……。俺が服買ってあげる。いつも美味しいご飯のお礼」

あの笑みと気持とが重なって。

「……………じゃ行く」

なあんて強がって結局OKしちゃうわけで。流石No.1ホスト

だなぁとか。

だって入る店がセシル・マクベイト……。

「しいちゃんセシル好き？」

「否、着たこと無いですから」

「マジでー？」

そんなに切長の目で見つめないでよ。やっぱり店の客とかはセシルとかフツーに着てるんだろな。

ん？私は別に弥恵さんは諦めるんだから比べなくても良いの！全く自分で呆れる位惚れちゃったみたいだ。

コレコレ！なんて言って楽しそうな弥恵さんを見つめた。

「あれ？しいちゃん俺に惚れちゃった？」

「……」

幸い、赤裸々を見られなくて手刀を食らわせたのが良かった。ばれてない。

「いいったー！ホストの顔は財産！毎日ご飯作って貰うからね！」

「なっ……！」

そんな事したらまた諦めがつかなくなる。この人は本当に私を困らせる。

「嫌かな……」

ホスト特有の演技ですねて見せる。分かっているのに騙される私。

「分かったから……」

「マジで？」

ああもう頼むから、その笑顔。心臓が跳ねた。だいたい、私がご飯を作ったことで、私にとくなんかない。

「服、こんだけ買えばいいでしょ」

「いや……逆に弥恵さんに迷惑じゃん。良いよ、そんなに」

「いない？」

ちょっと悲しそうに伏せる目。もう一体なんなのだろう。こんなに沢山（一年分くらい）セシルを……いくら金持ちとはいえ、ねえ。

「沢山ありすぎですよ。私、一日分で大丈夫……」

「だあめ。俺も沢山作ってもらうんだから！それに……」

ああ。そういう事ですか。それに？何だろう。

「これを着れば、しいちゃん俺の職場見にこれるよ？」

「……！」

私が3日前に言った事をちゃんと覚えていたらしい。

一回弥恵さんの職場が見たいと思った。純粹に。あまりに純粹過ぎて心で思っていたことが口に出たのだ。

「弥恵さんの働いてる所見たいな……」

「おっ！なにになに？しいちゃんからのお願い？」

「あ、否……その」

「良いよ。今度店においでよ。支配人には言っておくから」

「え、良いです！だって私、そんなに高い服とか持っていないから場違いで浮いちゃうし……」

私が思い出したのを見て弥恵さんの笑顔が出る。

「だから、ね？」

「……あの、私1年も通うなんて言ってな……」

「フッフ……それはどうかな」

弥恵さんの目が怪しく光った。

その日の夜

「はい！では今日も皆さん頑張ってくださいね。……ここで今日一日だけこのホストクラブでスウィーツデザイナーとして働いてくれるコを紹介する」

私は、緊張しながら前へでた。視線が痛い。男だけのホストクラブに女の従業員が入るのが珍しいせいもあるからだろう。

この中で唯一弥恵さんだけがクスクス笑っていた。

「仲間紫唾です。……今日1日お世話になります」

「おい、支配人！」

1人のホストがいきなり声を大きくする。やっぱり女の従業員はまずいんだ……。

私は何か言われることを予想して目を固くつむった。が。

「かぁいいじゃねえか！愛称決めないとな！」

「おお、そりゃそうだ」

次々にホスト達が私に近付いてきた。私はわけが分からないままボウとしていると、遠くの方から声がした。

「ヤエさん、なにがいいでしょうか？」

「ああ、その子なら俺はシイちゃんって読んでるけど？」

「おい、ぴったりじゃん？じゃ、シイにしようぜ？」

「了解！」

「シイ、宜しくな」

「はっはい！」

「シィ、俺に惚れようぜ！」

「嫌です」

「もう。しいちゃんは冷たいのね……」

肩に置かれた手。肩まである髪をオールバックに整えている。弥恵さんだ。

「何だか弥恵さんさんが違う人に見えて嫌です……」

「本名で呼ぶなよ。もう開店してるんだから。ヤエって呼べ」

「……それ、ホストとして使ってる名前ですか？」

「そうそう。おおっと、ミサキさんだ！じゃね。頑張りな」

ポンツと私の頭を軽く弾いて駆けて行く。まだ私を諦めさせるつもりはないらしい……。ボウとしていたら、支配人に呼ばれた。

「シィ！こっちへ」

「はい！何ですか？」

「はい！シィの持ち場」

キッチン。もともとフランス生まれフランス育ちの私は、バイオリンを始め、パティシエなどの勉強もしていたためこの分野は強い。

「頑張れ」

「はい」

開店後5分。始めてスイーツの注文が入る。

「シィ！アプリコットジュエル1つ入ります！」

弥恵さんのお客さんだ。

「かしこまりましたあ！」

直ぐに生地を焼いてアプリコットをのせて行く。 数分後アプリコットジュエルはお客さんに運ばれた。

「お待たせいたしました。アプリコットジュエルです」

「ありがとう」

お客さんが口に運ぶ。私は少し緊張した。

「……」

「ミサキさん、美味しい？」

「……こんなに美味しいの始めてよ……！」

「やっぱね。シィのスイーツは最高でしょ？」

「これを作っている人はシイさんって言っの？」

「うん」

「シイさんと呼んでくれる？」

「良いよ……シイー……！ミサキさん。シイ忙しそうだから後でね」

「そうね……」

私はミサキさんとか言うお客さんが注文していらい、物凄くいそがしかった。

スウィーツは飛ぶように売れたため、直ぐになくなる。

「今日はスウィーツおしまいだよ」

ホスト達も何度も誤らなくてはならなかった。

仕事後

「しいちゃんお疲れ様！」

「弥恵さん……」

「凄かったね……」

「はい」

「あのさ……もうここで働く気はない？楽しくなかった？」

「え……」

「支配人がしいちゃん雇いたいってさ」

「……！支配人に会って来ます！」

駆けて行く紫唾を見送りながら弥恵はクスクスと笑った。

「まさかしいちゃんがここで働くなんて……」

つづく

テストとバイオリン（前書き）

皆さんに楽しんでいただき、メッセージを貰うことがとても幸せに感じます。

テストとバイオリン

木枯らしが吹きます。寒くなってきたな。

秋です！

何てはしゃぐ私、仲間　紫唾は朝からご飯を食べに来ているヘタレホストに惚れた。

出会ったのは3週間前。その辺りは変な出会い方だったから、弥恵さんの記憶にも強く残っているらしい。

「しいちゃん！今日のご飯はなにかなあ？」

隣に立って、人が精一杯頑張っているそばでヘラヘラ笑うその人は、某ホストクラブのNo.1だった。

毎朝と毎夕ご飯を食べに来るようになった弥恵さんは、私が居ないときは何を食べているのだろうか？

「弥恵さん、私が居ないときってちゃんと食べているんですか？」

「ん？食べないよ。基本的に」

だから肉付きが悪いんだと言えば口を尖らせて『だっかしいちゃんの料理食ったら他の食う気失せるんだもんよ』だっ。ちよっとまだ諦められないかもしれない。3週間もたって更に惚れてる私……。

「もう！弥恵さん！お味噌汁が煮すぎて不味くなりますからおとなしく待ってて下さい？」

「あちゃ！ごめんよいちゃん……！飯のためなら俺我慢するよ！」

相変わらずご飯中心ね……。どうせ私なんて只の同僚に変わりないのだから。そうそう、私はついこの間から、お隣さんから同僚に昇格していた。

弥恵さんホストクラブで、シイのスイーツは物凄く評判で、支那人によるとこの2週間で売り上げが格段アップしたらしい。

……私のスイーツでねえ。こんな時にフランス生まれフランス育ちは役に立つ。

私は出来たお味噌汁とご飯を冷めないうちによそい、弥恵さんの前に置き、自分の前にも置いた。

「腹減った！よっしゃ！しいちゃん、今日俺同伴デートだから沢山食べるな！」

「……」

またか。しかもよりによって学校がある日に！邪魔できない！

「へへ……しいちゃんもしかして焼きもちですかあ？」

へらへら笑いながら言うくせに的をついているのが、弥恵さんの怖いところ。

「んははずないでしょ。米の心配ですよ」

「ちえー。つまんなあい」

「……キモス」

「なっ！紫唾！」

「……っ！」

不意に呼ばれた本名にドキリ。そうとう末期ね……。

「学校行くから出て」

「はあい」

予め用意しておいた鞆を手に、弥恵さんが出るのを待って鍵をしまった。

「じゃ、今日は夕飯はいりませんね？」

「うん。頼むよん」

弥恵さんの居ない夕飯か……ちよつと寂しい気がした。

アパートを出て、交差点に差し掛かる。ここからは、大通りになっていて、この時間帯は何時も人がゴミみたくウジャウジャいる。ちょうど私が信号機の前に立ったら赤になった。

「紫唾じゃん？おはよー」

何時もの聞き慣れた声がする。七緒だ。

「おはよー七緒」

「はれ？今日元気くない？弥恵さんの事？」

親友である七緒には、私がホストクラブでバイトしている事から弥恵さんの事まで教えて居る。

「まあ、ね」

「そうか。じゃ、教室でじっくり聞くよ。ここは人が多いもの」

「うん……ありがとう」

今の彼氏を落として付き合うまで持つて行った七緒は良き恋愛の先輩になる。

もともと、真似はしたくない。あれが効くのは彼氏の柚木君だけだ。

交差点を過ぎ、暫くすると学校が見えてくる。私の通う高校は全国的にもかなりレベルが高いらしく、なかなか成績のいい私でもテストの成績で上位に入るのは、5回に一回くらいだ。

そして今日がその超競争率の高いテスト初日。バイトを始めたからと言い、成績が落ちるわけには行かない。昨日は徹夜はよくないので良く寝た。悔いはない。

七緒と私は少し緊張しながらピリピリとした雰囲気の中に入っ

昼休み

「七緒、元気だしなよお……」

「え、えへへ……ごめんね紫唾。今日は相談にのれそうにないよ」

「うん……良いよ。……ねえ七緒？恋をすると、成績は下がる？」

「……下がる」

「……」

「違う……紫唾！いつまでも親に振り回され……あっ！」

「……」

七緒はあからさまに不味い、という顔をした。私の前で親のはなしはタブーなのだ。

「紫唾……」

「屋上行って来る」

「ごめん……」

「大丈夫だって。頭冷やしてくるね？」

「うん……」

結局その日はテストだけ受けて、そのままバイトに行くのだった。

「しいちゃん！浮かない顔だなあ」

「ヤエさん……」

「え……マヂでテンション低いし。何？どうしたの？」

「……」

私にはこり、と笑い誤魔化した。

「……しいちゃんが！変だ！」

いつもと違う私を見て弥恵さんが慌てふためく。気持とは裏腹に、今日もスウィーツは良く売れた。

弥恵さんも今日は絶好調らしく、ヘラヘラ笑いでまた客を捕まえたらしかった。

私を心配してか、No.3のホスト、ナカヤさんが話しかけてきた。

「シィ今日元気ないよ？どうしたの？」

ナカヤさんは、顔が可愛い系なので、癒し系キャラとして、このクラブでもなかなかの人気だ。

「そうですか？そんな事ありませんよ？ほら、指名が入っているん

ですから、早く行ってあげてください?」

「うん……」

ナカヤさんは心配そうにお客さんのもとへ向かった。

皆さんに迷惑を架けている私は最低だ。見た目だけでも元気になるうと、めいっばい空気をふるまった。

しかしそんな空気もほぼ毎日私に会って居る“奴”には、ばれてしまう。

「しいちゃん空元気だな」

「なっ! そんな事ないですって!」

仕事後、休息室での会話。私は弥恵さんのヘラヘラを見習ってヘラッとして笑ってみせる。

「どうしたんです? そんなに真剣な顔して」

「……紫唾」

「……」

その切長で綺麗な目で見つめるのは反則だよ……。あと名前。

「なんかあるなら、俺に言え」

「……」

「1人で抱え込むなよ」

「……そんな、急に言われても……」

「……バイオリン」

「……っ！」

「初めて会った日、ひいてた。……あんなにうまいのに、何で練習しない？ レッスンに通う気配もない。……何で辞めた？」

弥恵さん。ピンポイント過ぎるよ。そこだけは……そこだけは誰にも触れてほしくなかったのに。

「……バイオリン、嫌になって」

「嘘だ」

「……っ！」

「顔が嘘ついでる」

私は……この人には全く叶わないらしい。気付けば、自分とバイオリンの事を、いつしか弥恵さん話し始めている自分がいた。

つづく

悩みと涙（前書き）

多少シリアス？よく分かりませんが内容だけは真面目な話です。

悩みと涙

小さい頃の記憶。どこかはハッキリと分からないけど、多分当日住んでいたフランスの郊外にある家。

私がバイオリンを弾き始めた日の記憶。

「なあ？抱え込まないで。俺に話せよ」

「弥恵さん……」

「しいちゃんには世話になっているからとことん付き合っよ」

「……」

私は弥恵さんを正面に据え、押し黙った。だいたい、一体何で関係ない弥恵さんに私の事を話す必要がある？

「黙ってないで早く言えよ」

「本当に……何でもありませんから……」

「またか！そおやって！いつも俺に……隠して」

「……弥恵さんには関係ありませんから」

「何でだよ！」

肩を捕まれ、激しく揺すられる。

「家族の事だつて！何も話してくれない……！」

「……」

「お前はそれで良いのか？！それじゃ、何のために……」

辞めて。それ以上何も言わないで。

それを言われてしまったら、私は……

「紫唾……何だよ！なんでそんな……悲しそうなだんよ！」

「……ひ……弥恵さあ……」

「話せよ！俺に。何でも聞く。俺、お前の力になりたいよ」

今日だけはヘラヘラしてなくて。何だか真っ直ぐな視線が私の心臓を掴んだ。

「なあ紫唾……。お前そんなに頑張つて成績上げて、何がしたいんだ？」

「……っ！」

何で……？私は本当は分かっていた。私が大学を出てやりたいこと？大学なんか出たいの？本当は……本当は……。

「バイオリンがしたいんだろ？」

「うん……うん！」

気付けば、弥恵さんの胸に抱かれて、泣いていて。普段なら有り得ない光景で、こんな時なのに、ときめいた。

抱き締めていた手の力が、不意に緩む。私は心なしか、不安になり弥恵さんを見上げた。

数分後

「じゃあまた！俺としいちゃんは帰るからね」

「はあい。お疲れさあ」

弥恵さんと一足早く帰宅する。私が泣いている所を、ナヤトさんが見付けてくれ、『うん。理由は分からないけど……今日は帰りな？』と言ってくれた。弥恵さんが私を離れたのは、ナヤトさんが来る気配がしたかららしい。気配が分かるなんて凄いなと思った。

普段ヘラヘラしているからに、弥恵さんが凄い人に見えた。肩越しに弥恵さんの顔を見る。

「お？しいちゃんは俺に惚れたな？」

「……」

つい恥ずかしくて、弥恵さんの前を歩くようにした。

「反応なし、か。しいちゃんだけだよ。落とせないのは」

「え？」

「フッフ……何でもないよ」

「なんか……ムカつく」

「ハハハッ！まあ、しいちゃんはまた俺に飯が出来たね」

「あ！」

「……飯でいいから。それから……」

「？」

ピラリンピピラッ

「ん？」

携帯になる。全く、せっかく良い雰囲気なのに……。

「あ……」

両親からだった。震える手で電話に出る。

「はい……うん。そうだよ。うん。うん……明日ね。ばいばい」

「なにになに？しいちゃん顔が暗いぜ？」

「……弥恵さん……私明日……バイト行けません」

「親から？」

黙り、頷く。ゆっくり顔をあげれば、笑顔の弥恵さんがいた。

「安心しな。俺も行ってやるから」

「……はい」

ちよつと待つて下さい。笑顔だけでも反則なのに、優しい笑みつて何ですか。

あんまり魅力的すぎて、1分くらい見つめてしまった。

「……俺もそろそろ……だな」

「え？」

「いや。何でもないよ。さあっ！明日は戦いに行くんだから、体力の温存のために早く帰ってねるよ、しいちゃん！」

「……はあ」

き、気になる！と思いつつ、眠たい目を擦りながら帰路につく。

各部屋の手前で私と弥恵さんは別れた。

次の日

数時間前に会ったばかりのホストは既に私の家に来ていたらしい。私を起こしてくれた。

「おはよう、しいちゃん。今日も綺麗だね……」

甘い表情を出して手を握ってくる。私は無意識に口元が緩んでし

まったが、直ぐにこれが弥恵さんの悪戯だと分かり。

「盛ってんじゃねえ！」

「いだだだだ！」

弥恵さんの頭を連打。

「おい！馬鹿になったらどうするんだよ？女に甘い言葉が言えなくなるだろ？」

「大丈夫。もう弥恵さんは底まで来ていますから」

言い終わったあとの小悪魔的な笑みも忘れない。

「小悪魔！」

「本当の事を言っただけです」

弥恵さんが苦笑したように頭を掻く。これは、勝ち目がないと分かった時の仕草だ。

「全くその通りだ。うん！しいちゃんってば俺の事、分かりすぎ」

確に。言われて初めて、やっぱり弥恵さんが好きなんだとか。

「……」

「しいちゃんは俺、大好きだねえ」

「……無駄に一緒に居たら、そりゃ分かるようになるってもんです」
「ふうん」

返事はそつけないけど、心なしか楽しそうな弥恵さん。
一足先に食べ終わって、ヘラヘラ笑いで頬杖を突きながら私を見つめてくる。

「……何ですか？」

「ん？否……」

「変な弥恵さん……」ごちそうさま」

「はいはい」

「弥恵さんが作ったわけじゃないでしょ」

「お。悪い……つい」

にへらあ。

頭を掻く。その仕草さえも……魅力的……。

「しいちゃん？」

「……！」

面と向かってジツと見つめていたらしい事に気付き、慌てて顔を反らし片づけへ向かう。

「……しいちゃん……今……」

「それ以上言ったら殺す」

「はい」

恥ずかしさ勝つての、言葉は、もしかしたらチャンスだったかもしれない今を潰す。

弥恵さんと自分の食器を流しにもって行くと、後ろに弥恵さんが立つ。

「なあ……俺がついてるからさ。ヘタレだけど……こう言う事は、得意なんだ」

「ヘタレ自覚してましたか」

「ああ。……いつも済まない。一人ではなにも出来ないんだ……」

「弥恵さん……」

「……?」

「そろそろ戦いに行きましようか」

「お。行くの。頑張ろうな」

「……うん」

私はそれから数十分準備をし、いつも伸ばしている髪を結び、制服の短いスカートは下ろし、いかにも優等生を装う。

「……なんだか……しいちゃんじゃないや」

そんな私を見て、弥恵さんは苦笑混じりに呟いた。

「弥恵さんも、スーツのインナー、間違えてお仕事用にしないでください?」

「分かってるよ」

弥恵さんの準備が整ったのを確認し、家を出た。……ちゃんと鍵をしめて。

現在、ここ東京から電車に乗り、実家のある山梨へ向かう。
電車だとかかなり時間がかかってしまうので、もちろん特急を選んだ。

「うーん。実は俺、実際に電車のあの、初めてかも」

「マジですか?」

「マジマジ」。これ、ちゃんと寝るスペースがあるじゃん」

「そうですね」

中に設置してあるベッドをながめ、弥恵さんがニヤリ、と笑う。

「ねえしいちゃん」

「はい？」

「沿い寝しよ？」

「絶対嫌です」

即否定（だって……！）した私を見て弥恵さんは多少楽しそうな感じ。私はと言うと、緊張のあまり、駅弁的な物も食べられなかった。

「しいちゃん、着くまで寝よう。ゆっくり休まないと明日体がもたないよ」

「はい」

辺りはまるで銀河鉄道に乗ったかのように、美しい星達が輝いていた。

「綺麗だね……」

弥恵さんが寝る前にそう言ったのを、私は翌日まで覚えていたが、やがて薄れていった。

続く

電車の旅（前書き）

テスト前のために更新が遅れてしまい、申し訳ないです。

電車の旅

暖かい。そんな雰囲気体が包み込む感覚が心地いい。このまま、半日くらい寝ていられそう。ガタン、と寝ているベッドが揺れ私の睡眠を遮る。

多少不機嫌な頭を起こすと、銀河鉄道の旅は終り、優しい朝日が迎えてくれた。

ふと、脇腹に当たる、柔らかい毛の感触。まさか！

「やだっ！弥恵さん?!」

「う……?」

ムク……と起き上がる顔のわりに大きい体。180は優に越える長身男は起きて早々天井に頭をぶつけ、苦痛にうめいている。

「弥恵さん！何で私の横に?!沿い寝はやだっって言っただでしょ……」

ヘタレは頭が起きたらしく、にへらと笑い、

「しいちゃん起こそうとしたら気持ちよくて寝ちゃった……」

何て呑気な事を言い出す。『だってここ窓際だしね?』

「……セクハラ」

「えっ……俺としいちゃんの仲じゃない」

本気で焦っている弥恵さんがおかしくて、つい笑みがこぼれた。

色々やって座席につくと、朝食が運ばれて来る。うん、今日はマロンパイとローズティー……甘さに酸味が良く合う、何だか恋みたい、何て思う朝食だった。

弥恵さんはそれを聞くと大爆笑したので、忽ち私達は乗客の顔見知りになる。

「弥恵さん……笑いすぎ」

「ごめん！だって女子高生からこんなにクサイセリフが出るなんて恋愛小説位なんだもん！」

「……！」

思わず赤面、私、そんなにクサかったかな？

恋をするとなんでもクサイセリフの1つや2つくらい、言いたくなる物なのだと自分にいい聞かせ、何とか落ち着かせた。

ふと、弥恵さんを見るとバツチリと視線がぶつかる。え、あつちも私を見てた。慌てて顔をそらす。

「何ですか？」

「うんや。俺しいちゃんの事何も知らないなあ……って思ったのさ」

「これから大体の事は分かりますよ。実家に行くわけだし」

「うん」

「弥恵さんこそ、私の中では“謎多き隣のヘタレホスト”です」

「せめて“隣のホストさん”と言って欲しいな」

「ヘタレが足りません」

「……やっぱ？」

にへらと笑うけど、どこか苦笑混じり。何だかそれが妙に色気があつて大人の男を感じさせる。

……ちよつと、寂しい気持になつた。私は何だかんだ言いながら結局は仕事の後輩で、隣に住んでいるだけなんだ……

私の氣を知つてか知らずか、頭に優しい感触が触れた。弥恵さんの、優しい表情がある。柔らかな顔付きはしているけど、私はこの人が優しい表情をするところをまだ2回しか見ていない。

弥恵さん、妙に冷めていたりするから、時々怖くなる。それだから優しい笑顔を見る事が出来る人って私くらいなのかも、とか勝手に想像したり。

舞い上がってボーっとしていたら弥恵さんに不思議そうな顔をされた。

「……しいちゃん今日は考え事多くない？俺にも構つてよう」

「え……？あ、ああ！済みません」

余りに幼い言い方につい苦笑が混じる。弥恵さんはいち早くそれを察知したらしく、むくれた。

「なんだよ。誰だって相手にされないと悲しいじゃん」

「分かってますって」

「……」

ちよつと照れ臭そうに、頭を掻く。言うことや態度は幼い癖して、ちゃんと大人であるべき所はきちんと育てられた、と言う感じ。もしかして弥恵さんて、実はかなり良い所の坊っちゃんなのかも。

どうこうしているうちに、景色のなかに寛大な、ツンと立つ日本一の背高帽が見えた。

「すげー！生富士山初めて見た！」

山梨だ。

テンションの高くなる弥恵さんに比べ私はテンションが下がる。

ああ、これからあの大嫌いな白い家に行くのだ。
考えただけで私は身震いした。

「しいちゃん……大丈夫だよ。なんたって女性の話を聞く仕事してる俺がいるんだし」

「お母さんなら弥恵さんの言うこと聞いてくれるかもだけど……」

「あちゃー……お父さん居るの」

「当たり前！」

「……っ俺んちは居ないよっ……」

「え……」

もしかしてこれは弥恵さんの事を知るチャンスかも。聞こうとしたのに、時間は私の見方ではないようだ。

『次は甲府　次は甲府　……』

「あつ！降りなきゃ！」

「おつまジ？」

慌てて荷物を掻き集めて電車が停止するのを待つ。

私はさっきの事が聞きたかったけど、弥恵さんが話す時に話してくれると信じて、今は聞かないでおく事にした。駅を出て、町中に入り、市営のバスで実家がある地区へ行く。甲府市にあるとはいえ、若者で賑わうショッピングモールの近くに家があるわけではなく、郊外にあり、そこには静かな住宅地が広がる。

私と弥恵さんは一番近いバス停で降り、実家へ向かって歩き出した。私の実家付近は、何故だか坂が多く、成れた私にはなんの障害もないけど、体力の無い弥恵さんは（絶対子共の頃からお酒やってた）ハアハア言い、ついに実家まであと少しのところで膝にてをつけて止まった。

「し、しいちゃんは……疲れない、のお？」

「弥恵さんは酒の飲みすぎですよ。いかにも体力なそうだし」

「なっ……」

「ほら、あの坂を上げれば私の実家です。頑張つて」

「ううゝ」

弥恵さんは足を引きずり着いてきた。家が近くなるに連れて、言葉数が少なくなる私を見て、弥恵さんは一生懸命話しかけてくれた。

「……着きました」

大きな、真っ白すぎる壁。庭がやたらでかくて、庭の隅には昔飼っていた犬、ジャスティの墓がある。

「じゃ、戦いに行きますか」

「はい」

インターホンに手を伸ばす。けど、やっぱりあと少しのところまで手が震えてしまう。

と、不意に手に暖かい優しさ。

「弥恵さん……」

「大丈夫。俺がいるから。ね？一緒に押そう」

「うん！」

重なった手が、ゆっくりとインターホンに近付き、

ピンポーン

インターホンをならした。

緊迫（前書き）

試行錯誤。

なかなか印象的なシーンにするための表現が思いつかず、かなり日にちがたちました…

緊迫

ガチャリ。音がなり前より少し痩せて老けたお母さんが出てきた。

「紫唾、いらつしゃい。……久しぶり、ね」

「久しぶり」

弥恵さんはにこり、といつもとは違う種類の爽やかさが漂う笑顔をお母さんに見せながら真面目な顔で挨拶した。

「初めまして。僕は紫唾さんのバイトの先輩に当たる者です」

『僕』だなんて！弥恵さんは普段『俺』って自分の事を言うから、『僕』を使う所を見ることなんてきつと希少価値なんだ。

「先輩の、橋矢田 弥恵さん。優しくて良い人よ」

「そう……」

お母さんが弥恵さんを上から下までジッと眺め、目を細める。流石に弥恵さんもこの失礼な行動に顔が引きつった。

「もう！あんまりジロジロ見ないでよ！弥恵さんに失礼でしょ」

「ああ、ごめんなさいね」

「お構い無く」

でも流石にホスト、弥恵さんは直ぐに体制を持ち直し、お母さんに笑いかけた。

お母さんは 恐らく作り笑顔 を浮かべて、弥恵さんと私を招き入れる。

「ただいまー……」

「お邪魔します」

「二人ともいらっしやい」

懐かしいほど嫌な記憶しかないそこは、前より少しくたびれていて、あまり変わっていない。

お母さんは賢明に私と話をしたがっていた。

「ねえ、紫唾。学校では友達は出来た？貴方、真面目すぎるから心配で」

お母さんが『真面目すぎるから』と言ったときの弥恵さんが笑いそうになるのを睨みつけ、必要最低限の事を話す。お母さんと話すと、気分が悪くなるのだ。

「……いる」

「そう！良かったわ。ねえ？何て言う子なの？成績は良いの？」

出た。これだ。うちの両親はどこかが大きくずれていて、頭が同じレベルの人とつるめと言うのだ。頭が下の人とつるむと、影響される可能性があるから、ね？ きっとさっき弥恵さんを嫌な目で見

たのは、金髪の人が皆馬鹿だと思っているからだ。

しかし今の時代東大にR系のお兄ちゃんやギャル娘が入ったりするのだから、それは間違いになる。

「勉強ははかどっているかしら？」

「まあね。長旅で疲れているのよ。私達を休ませて」

「そうね。部屋で休みなさい？紫唾は荷物があるからお連れさんには先に部屋で待ってもらったら？」

「うん。弥恵さん、良いですか？」

「ふえ？あ、ああ！わかった」

弥恵さんはスタスタと階段を上がっていった。

荷物を片付けて部屋に上がると、弥恵さんが私のベッドに寝転がって、くつろいでいる。私はやっと緊張の糸が切れ、膝の力が抜けてその場に腰が降りた。

「……しいちゃん。」

弥恵さんが心配そうに顔を覗く。

「大丈夫ですって」

「おう。でもしいちゃんお母さんとあんま仲良くないんだな？」

「当たり前、だってさっき見たでしょ、成績の事しか眼中にない」

私はかけていた眼鏡を外し、結っていた髪もほどいた。

「なあ？ やっぱちゃんと話した方がいいよ。バイオリン。したいんだろ？」

「まあ、そうですね」

でも、あの母に言って何が分かるのだろうか？

「心配するな。俺も言っただけから」

「え……」

こんな時にも関わらず、なぜこの人はこんなに優しいのだろう。つい、甘えなくなる。止めて。私は甘える事はとくに諦めているのに。

「紫唾！ 橋矢田さんも、ご飯よ」

お母さんだ。夕食と言うことは、お父さんが帰ってきた印。

「はあい！」

「ちよつ弥恵さん！ なに人ん家で元気にご飯望んで……！」

「いいじゃないいいじゃない。いつだってご飯は美味しいもんだぜ」

「？」

「もう」

何故だろう、弥恵さんと居ると元気になれる自分がいたりして。素敵なこと。

多分夕食にはお父さんが居る。修羅場になるけど弥恵さんと一緒に乗り越えられる気がした。

階段を降りて行くと、辺りは既に芳しい臭いが広がっていて、私たちの食欲をそそる。

お父さんが、弥恵さんを見るなり、怪訝な顔をした。お母さん同様、金髪は頭が悪いと思い込んでいる。

それを察したのか弥恵さんは、私がお父さんにバイトの先輩なの、と紹介したあとに、

「えーっと……取り合えず、早稻田の慶應でてます」

なんて、私も知らない凄い経歴を言った。

お父さんも、流石に態度が代わり、話題は私の話になった。

「で、バイトとは、何をしているんだ？」

「ギクリ。」

「カフェですよ。彼女のスイーツが評判なんです。ほら、彼女スウィーツ得意でしょう？」

「そうなのか？」

お父さんは不思議そうな顔で私を見つめる。私は黙って頷いた。それはお母さんも同じで、私の両親は私が何が得意だとか、好きだとかは関係なく、只私の頭だけを見ているのだ。

素顔の私を知らない、しろうつもしない、只成績だけを見る。弥恵さんは心底驚いたようで、目を見開いた。

「貴方たちは、自分の娘の得意なものも知らないのですか？」

「そんなことはない。なあ？紫唾の得意なものはまだ有るよな？」

来た。

「勉強」

瞬間、弥恵さんの周りの空気が変わる。声は変わらないものの、静かになった。

「……ちよつと、失礼」

カチン といって弥恵さんはホスト特有のあの高そうなライターで煙草に火をつけた。

私は弥恵さんについて知らない事が多すぎる。きつとミサキさん達お客は皆弥恵さんが煙草を吸うことを知ってるだろう。

「君は煙草を吸うのかね」

「たまに」

「私は吸わんのだよ。何しろ臭いからな」

大事なことを忘れていた！お父さんは煙草が大嫌いなのだ！

案の定、お父さんは多少機嫌悪く鼻を鳴らし食事に取り掛かった。

「で。お父さん、マジでいいちゃんの好きな事知らないんですか？」

「いや、だからさっきから言っているだろう。勉強だ」

まるで私に頷けと言つかの様に、視線で威圧してくる。

危うく頷こうとする所に弥恵さんがくちぱくで ダイジョウブ。

オレガツイテル。 って言うのが分かった。

弥恵さんにコクリ、と頷き深呼吸をしたあと、お父さんを見据えた。

「お父さん。私、バイオリンが好きで、得意なのは勉強よりお菓子づくりなの」

一瞬の沈黙。私は緊張した。思いきって言ったのだ。お父さん達もきつと分かってくれるよね？

夜明けの希望（前書き）

前回に引き続き、紫咂の実家へんです。
お楽しみください。

夜明けの希望

期待したのに。私、気持を伝えようと、心を開こうと努力したのに。

私のやり方が悪かった？伝えようとするほどに、頭の中が真っ白になった。

「バイオリン……？スウィーツだと？」

「……！」

何故、何故。お父さんは分かってくれなかった。

「紫唾。何か勘違いしているぞ。お前が好きなのは勉強で得意なことも勉強の筈だ。その男に何を吹き込まれたか知らないが……父さんはお前の事が分からない筈がない」

私はもう、言葉も出ず、只押し黙っていた。

「そうよ。小さい頃から紫唾はずっと勉強が好きで……」

止めて、ヤメテ……！どうしてそんな事が言えるの？私にバイオリンを習わせたのもスウィーツを教えてくれたのも、お母さんじゃない！

もう聞きたくなかった。一度開きかけた扉は、開く寸前に、また閉じようとしていた。

光が失われていく……私の心が闇に染まりきる前に、誰か助けに来て……！

「あなた、どうしてそんな事が言えるんだ！」

その時だった。一筋の光が、私を細く、しかし力強く照らした。私の光源は、弥恵さんだった。

「何……？」

「あなた、おかしんじゃない？娘がそう言ってたんだ、紫唾はバイオリンが好きでスウィーツ作るのが得意に決まってる！あなたらは全く紫唾を見てないぜ。否、見ようとしななんだ！」

緊迫した状況なのに、裏腹に晴れていく私の心があった。

「弥恵さ……」

「ほら。もう一度、しいちゃんの口で伝えるんだ。しいちゃんの両親が聞いてくれなくても俺が聞いているから。覚悟をきめて、自分の気持ちを言っただ」

私は暫く弥恵さんを見つめた後、コクリと頷き、慎んで微笑みながら言った。

くぐもってモヤモヤした感覚はどこかに消えている。

「お父さん、お母さん。私は勉強よりも、バイオリンがしたい。スウィーツ作りたい。今のバイトも、嘘はつきません。ホストクラブのキッチンなの」

自分でもビックリするくらい、スッキリと晴れ晴れしい気分の自分が嫌な思い出が詰まった部屋に凜として立っていた。

「何て事だ！ホストクラブだと？！」

「ご近所さんに会わせる顔がないわ！」

なんと言われようが構わない！私は今、自分に自信を持っていた！

「バイオリンのレッスンは、通わせてあげてください」

「そんなの、お金の無駄よ」

「俺が払いますから」

「え……？」

この言葉にはさすがに驚いた。

「しいちゃん、俺金はあるし大丈夫だよ。なんたってN O ・ 1ホストだし」

そつえばそうだった！この人の貯金は一生では使いきれないくらいのお金だったのだ。

「詳細は後で話すよ。今はご両親に理解してもらいな」

「はい」

私はお父さんおと母さんを見つめた。否覚悟があり強い意思を持った目をしていたため、睨んだ様に見えたかもしれない。

「お父さん……お母さん、私はバイオリンを習います」

「下らん！」

お母さんも反対だろう。お父さんがここまで否定したのだ。

「あなた、紫唾がやりたいならさせた方が良いと思います」

「なっ……！」

お母さんはニツコリと微笑むと、お父さんを見つめた。

「私嬉しいの。やっと本音を話してくれて。きっとあの子本気よ」

「下らん……」

「あなたも分かるでしょう？あの子の目色が違ってたわ。きっと何を言っても無駄よ」

悪いのは両親だけじゃなくてきつと何も話さなかった私も……。お母さんは腕をくんでグチグチ言ってる。

「紫唾、部屋に戻ってお風呂の支度をしなさい？」

「は、はい？」

「……じゃ、失礼します」

「こるから起こるであろう事を弥恵さんはいち早く察知したらしく、一緒にお風呂入る？」なんてセクハラな発言をして来る。

「……嫌」

「つーめーたー！入る前の風呂掃除位付き合ってよ……」

「あ、風呂掃除ね」

「まさかしいちゃん！変な方向の想像した？」

「弥恵さんがセクハラ発言みたいなのするからです！」

私が階段の途中で子付たため、弥恵さんが足を踏み外しそうになる。

「わわっ……！」

「あっ！ごめんなさい」

慌てて弥恵さんの腕を掴み引き寄せる。細々している弥恵さんは私の力でも十分引き寄せる事が出来た。

「もう！危ないだろ？……俺が怪我してホスト休んだらどれだけの女の人が泣くと思っただの？」

「……！」

今、私弥恵さんの声なんて聞こえてなかった。だって、息か額にかかってくる……私と弥恵さんの距離は近いから。

恥ずかしくなって、うつ向いたら、弥恵さんは暫く考えて気付いたらしくて、パッと離れた。

「……なんか、その、ごめんよ？」

「……別に、気にしてないし」

「クク……」

ちょっと強がって見たら、急に弥恵さんが笑いだした。

「なっ！なんですか？」

「だって、しいちゃんかわいんだもんよ」

「可愛い……？」

やっと赤面が治りかけたのに、この人の仕草、言葉、視線に……
また、赤面した。

「赤面してんのに、強がる娘、俺初めてだ。しいちゃん。やっぱり俺には君が新鮮に感じるよ」

「……？」

それは誉め言葉ですか？って聞こうとしたけど、弥恵さんはさっさと二階に上がっていつてしまった。

翌日

「うん。また来るから。じゃあね」

これから、一日かけて東京へ帰る。
お母さんは駅まで見送りに来てくれた。

「じゃあね。東京でも頑張るのよ？橋矢田さん、紫啞を頼みますね」
「任せてくださあい！」

「お母さん、私勉強も頑張るよ。勉強してフランスに留学する」

「金は俺持ち」

「まあ！悪いわ！私達が頑張っただすから、橋矢田さんはお気遣いなく？」

「いや、俺も一緒に行きたいし」

「「え」「

二ヘラ、と笑って弥恵さんは頭をかいた。

また明日からは、普通の生活が始まる。でも、私は今までの私じゃない。ちゃんと自分に自信がある。

「さあ！これからスイーツの勉強しなきゃ！」

『間もなく、山梨 東京の特急が発射致します。ご購入の際は
』

「早く!しいちゃん」

「待って下さいー!」

やがて男女の陰は人混みに紛れて見えなくなった。

嵐の前の休息（前書き）

今回は最終話の序章になります。

嵐の前の休息

朝起きて、窓開けて新鮮な空気を吸う。

「なんて平和な朝なの……！」

何だか私は100年ぶりに朝が来たような気がした。何故だろう……暫く考え気付く。

そう。今日は奴が来ていないのだ。いつもなら、しいちゃんしいちゃん煩いくせに……。どうかしたのだろうか。

何と無く嫌な予感がして、私は（実は初めて）弥恵さんの部屋へと向かった。

ガチャリ。

「弥恵さん。どうしたんですか？ 今日朝御飯いらないんですかあ？」

「……て」

「……？」

「しいちゃん……助けて……」

何と聞き取れない声がしたかと思えば、床に彼が転がっていた。

「新手の遊びですかあ？ 悪いけど、遊びに付き合ってる暇はありません」

せん！さ、早く起きて！」

無理矢理起こそうと弥恵さんを引き上げたら、何と本当にキツイらしく、涙目で辛そうな顔をしていた。

「う……吐く」

「ええっ！は、早くトイレへ！」

数分後

「う……俺、死ぬかも」

「なあに言っちゃってるんですか。只の風邪でしょ？いつもの10倍ヘタレてますね」

動けない弥恵さんをベットに寝かし付けた。

「……」

「お薬は飲みましたか？」

「飲んでない……動けなかった」

「はあ。何処に？」

「あそこ……」

弥恵さんは生活感が全く感じられないスッキリと片付き過ぎた部

屋の、これまた中はカップ麺ばかりの食器棚をさした。

「うーわ。カップ麺ばかりじゃないですか！肉付き悪いのが良く分かります！はい、これ飲んでください」

「口移し」

「……もがき苦しめ」

「済みません。調子のりすぎました」

なあんだ。以外に元気そうね。これならほつといて大丈夫そう。

「じゃ、安静にしてください？私は一度戻ることにします」

そう言々と私は、弥恵さんを残し部屋を後にした。
さあて。粥でも作ってあげよう。弥恵さん、きっと喜ぶ。

「ホストが風邪引くなんて間抜けね」

笑いながら調理にかかった。

粥を持って行くと、いつの間にか寝てしまったらしい、弥恵さん
は何かブツブツ呟いている。

「ん……し……あ」

「！」

私の名前。もしかして私の夢見てる？

「真由……こ……」

「まゆ、か」

まゆ。私と弥恵さんが初めて会った日以来の名前。

事情は知らないけど、弥恵さんとはとにかく帰って来てと言っていた。

ズキン、となる。何だろう。この胸騒ぎは。そうだ。私はこの後に及んで弥恵さんが好き。

今、私は確実に考えがある。

『まゆ』さんは、弥恵さんの恋人なのではないかと。

考えていたら、弥恵さんが起きたらしい。

「どした？紫唾、切なげな顔だ」

「……っ」

今考えたつてしょうがない。弥恵さんには聞きにくいし。私に出来るのはただ一つ。

「お粥作って来ましたよ。食べます？」

「お！粥粥！やったー！！」

元気になったらしい弥恵さんを見て私は安心した。

その日の夜

今日一日寝る羽目になった弥恵は、目が冴えてしまい、起き上がる。

と、足の方に重たい感触。

「おっと……俺の小さいコックさんはお休みか」

目の前に居る少女はスウスウと穏やかに寝息を立てて居た。

「……無防備」

弥恵は、今日は頑張らせちゃったしなあと、そつと彼女の髪を透いた。

「今日はあんがとね、紫唾」

そしてそう言っただけで彼女の額に口付けた。

「起きてるときは絶対あげられないご褒美」

何だか眠くなり、弥恵も寝るのだった。

勿論、足元の小さな彼女に布団をかけるのを忘れずに。

空回リスレチガイ（前書き）

最終話です。

私自信この作品を愛していたため、最終話遅くなりました……ごめいわくおかけしました。

空回りスレチガイ

皆さんお久しぶり！

仲間 紫唾です。

私は、もう高校三年だからこの時期になると、クラスの仲間達は皆大学受験するみたい。

あれから、父さんに認めてもらうために私はこれまで以上に勉強をした。

すると、私はいつの間にやら、校内一番になっていた。

担任は、私を誉め干切った。なぜなら、この高校史上初の一番を持続した者だから……らしい。

一番を持続した事はウチの高校ではフランス留学へのチケットが渡されたようなものである。

と言うのも、毎年卒業者のなかから、最も成績優秀者を選抜するからである。

国が援助する資金でフランスに独学留学できるシステムだ。

この事を弥恵さんに話したらとても喜んでいた。

そして、一緒にフランスへ行くと言い出した。……どうやら本気だったらしい。

「あつちには、頼もしい知り合いが居るからさ」

誰だろう。とにかく私の為に緊急帰国してくれるらしい。 頑張って料理つくらないと！

と、弥恵さんの携帯がなりだした。

着メロが『アシタカせつ記』だ……もののけ姫ファン？

「あ！真由？……うん、うん。着いた？しいちゃん家はね、三つ目

の角だよ」

「え」

真由……さん？もしかして、弥恵さんの……。

「ああ、しいちゃん真由の事知らなかったっけ？」

聞きたくない。嫌だ。ヤメテ……

ガチャリ。

「弥恵ー！お久しぶり！」

いきなり、あかいドレスを纏った金髪の美女が……！まさか、この人？

「うわぁ！真由ハヤッ！」

あ。無理。こんな人に叶うはずがないよ。
真由さんは、弥恵さんに抱きつく。

「あの、真由さん……？初めまして」

「あらあら。可愛い子ね！もしかして弥恵、この子が例の弥恵の……ムゲウ」

「バカッ！それいじょういいなよ」

あれ？弥恵さん顔真つ赤……真由さんの帰国がそんなに嬉しいんだ。

「あの、失礼ですがお二人はどんなご関係で？」

「あら。弥恵話してないの？」

「ああ、俺達は……」

弥恵さんが何か言おうとした瞬間。

「恋人同士よー！」

と真由さんが叫んだ。十分だった。私は、涙が出そうになるのを堪えて、

「わ、私、醤油買ってくるね？切れたみたい」

と言った。自分の声が思ったより弱々しくて、びっくりしたけど、私は家を飛び出した。

去り様に、弥恵さんが私を止める声が聞こえた。

弥恵モード

真由っては何言い出してんだよ！

しいちゃん、あんなに弱々しい声……俺の事ちよつとは気にしてくれているのか？

俺、今までしいちゃんに会いたくて沢山迷惑かけたけど、やっぱりアンタを諦められないよ？

真由に相談するんじゃないよなかつたぜ。

「何てこと言うんだよ！？」

「ふん。焼きもちよ」

「な……！糞姉貴！後でぶつ潰す」

先ずはしいちゃん追い掛けなきゃ！

パタン！と戸を閉めて走り行く弥恵を見て、真由はにこやかに笑う。その笑顔は優しく美しい。

「こうでもしないと、あの子達はクツツキそうにないからね！」

紫唾モード

はあ。私が馬鹿だったのよね。早く諦めれば良かった。

最初から分かってたくせに。弥恵さんだつてきつと真由さんに会うために一緒にフランス行ってくてくれたんだ。

「ばかだな私」

私は近くの公園に座り込んだ。

それから、何時間たったのだろう。弥恵さん達流石に心配するかな。……帰る。

私はあまり気が進まないから、家から遠い東口から公園を出た。

弥恵モード

俺は、公園に来ていた。部フランク蘭子が揺れてる……紫唾が居たのか？
まだ近くにイルカもしれないな。

俺は公園の西口に走り出した。

はあ。紫唾はどこいった？いない……っつか、大体俺と真由が姉^{うだい}弟に見えない方がおかしいんだよ！

俺達クォーターだから、同じ青い目と同じ金髪してるっつの！

……あれ？あれ紫唾か？紫唾だ！やっと思付けた！

ったく、世話がやけんな。

紫唾モード

なんか疲れちゃった。コンビニ寄ってこ。実際醤油切れてたんだよね。

「いらっしゃいませ」

わあ。カツコいいお兄さん……！

弥恵さんなんて知らないんだから！この人に乗換え……

「おい、紫唾！」

肩に手が触れた。

この声……弥恵さん？

「弥恵さん」

「『弥恵さん』じゃねえ、馬鹿！」

息切らして汗かいてる……もしかして、探してくれたの？

「探すだろ」

「ごめんなさい……真由さんは？」

「あゝ？糞姉貴なんておいてきたよ」

今なんて言って……糞姉貴って

私のなかに、真由さんが思い出される。……あ。同じ青い目と同じ金髪してるっつの！

「あの、とりあえず醤油買います」

「……まいペーす」

私達は醤油を買ってコンビニを後にした。

「つたく、真由も真由だ！」

「弥恵さん……探してくるたんですね」

「……まあね」

あ。またあの笑いかた。今日初めてだな。

「ありがとうございます。あの、私この際伝えておきたい事があります」

伝えるなら、今。真由さんがお姉さんだから、私が好きとは限らないけど。

ハッキリさせておきたい。

「んー？言いなさい言いなさい俺に！」

「……はい。あの、私なんか弥恵さんの事、好きみたいです」

切なくて、涙出てきた。弥恵さん、困るかな。

「……マジ」

「え？」

弥恵さん、泣きそうな顔してる？……断られるかな。

「紫唾つて奴は俺を焦らせてばかりだ……」

「ごめんなさい……？」

「ちげえよ。俺だってお前が好きなんだよ」

え？

「えええええええー！？」

夕暮れに私の声がこだました。……恥ずかしい

「さあて！見事二人もクツツイタ事だし！今日は一流パティシエ、橋矢田真由のパーティーよ！」

「会場俺ん家」

帰ったら、弥恵さんが真由さんを怒鳴る勢いで入ったけど、本人がクラッカーを持って手を繋ぐ私達を祝福したため、あれは真由さんの作戦だと判明した。

「真由はね、昔からあの方法でカップルを作って来たんだ。……俺忘れてたよ。恥ずかしいな」

さあ！卒業まで頑張らないと！

空回りスレチガイ（後書き）

ご愛読ありがとうございました。

10話程度しかないこの作品ですが、嫌味のないホストを書いてみたくて書きました。

弥恵さんを『ヤエ』と読んでいる方も居るかもしれませんが、彼は『ヒロエ』さんです。

仕事時のみ、『ヤエ』となります。

しいちゃんに関しては、実はリア友がモデルだったり。頭が良く、料理ができる可愛い子なのです。

……流石にバイオリンはひけません。

では、またどこかでお会いしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9858a/>

隣のホストさん

2010年10月12日04時04分発行